

令和7年度【2025年度】とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	荒川区立三河島保育園
----	------------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「観る自然・育てる自然」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

- ・公園に恵まれた園環境であり、出かけた先で様々な植物に触れる機会があり、関心を広げてみたいと感じたため。
- ・畑やプランターで子どもたちが育てている野菜や花について、興味や疑問の声が増えてきている、その興味をより深く探求できる環境について職員で考え合い、実践していく機会にしたいと考えたため。

2. 活動スケジュール

- 4～5月 子どもたちの実態調査、実践に向けた教材検討
- 6～8月 年齢ごとに保育内容計画・検討・協議
- 9～1月 年齢ごとに保育実践・記録
- 2～3月 総括・振り返り・次年度に向けて意見交換

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・栽培活動…畑の増築、培養土や液体肥料、鉢底石、ジャガイモなど秋植えの野菜
- ・気づきや発見の視覚化…デジタルカメラ、プロジェクター、タブレット、変換ケーブル
- ・自然に触れた経験や思いを表現するあそび…絵具、画用紙
- ・実物を見る・育てる…虫かご、虫取り網

4. 活動の内容

- ・栽培活動…今まで三河島保育園で育てた経験のない秋植えの野菜や花を育て、その気づきや発見を直接見たり触れたりしながら楽しむ。また、友だちと共有することで新たな着想を得て、より深く探求することを楽しむ。
- ・気づきや発見の視覚化…周辺環境の自然に興味をもった時など、日常の中で写真や映像で記録し、それをクラスや園内で発表・共有する。友だちと気づきを伝え合うことで、興味の輪を広げていくことを楽しむ。
- ・自然に触れた経験や思いを表現するあそび…野菜の収穫時や紅葉を見た際など、自然を見たり・触れたりした感覚を自由に表現することを楽しむ。
- ・実物を見る・育てる…セミやバッタなどの虫の生態や生育環境に興味を向けながら、捕まえて育ててみたり、形や動きを観察することを楽しむ。

事例名「 育てる 」

令和7年 5月28日～

対象児:2歳児クラス

三河島保育園

重盛 江都

◎実際にみられた子どもの姿

・5月28日



☆ヒマワリの種を植える。
“種”が何か分からず保育者の話を前のめりに聞いている子が多い。
「おはなさくの?」と口にする子もいた。

・6月3日



☆芽が出てくる。
数日後から芽が出てきて、どんどん大きくなる様子に、興味をもって観察する子が増える。

・6月6日



☆水やりを楽しむ。
クラスでの経験から、園庭でも植物への水やりを楽しむ姿がみられる。

・7月末

☆暑さのためか、ヒマワリの花は咲かなかった。「またおみずあげたい」という声も聞かれる。

・9月26日



☆カブの種を植える。
“おおきなかぶ”の絵本に慣れ親しんでいることもあってか、ヒマワリの時より興味がある様子。

・10月7日



☆芽が出る。ヒマワリの時よりたくさんの芽が出て子どもたちの興味も高い。葉の形を「ハートみたい」「リボンみたい」と言葉にする子もいる。

・11月17日



☆「カブができてる!」と気づく子もいる。「だいこんかな?」という予想もある。

・11月下旬

☆収穫し食べてみる。



○援助の工夫 ●保育者の思い

●ヒマワリの種を全員に見せ、触れられるようにしてみた。“種をまくと芽が出てきて花が咲く”という流れを説明したが分かりづらかったような印象。図(絵)にして見せても良かった。
○グループごとに水やりができるようにした。
○子どもたちの様子をドキュメントとして掲示し、保護者にも興味をもってもらえるようにした。

●芽が出てくることで興味が湧く子もいたので、好きな時に観察できるような場所に設置した。
○ドキュメントを続けている。

●植物に水をやるという楽しみを見つけ、園庭の花にも水をやる姿に面白さを感じた。「おおきくなってる」という気づきの声も聞かれるようになり、子どもたち自身の成長も大きい。

●枯れてしまったヒマワリを見せて「なぜ咲かなかったか」という話をしてみた。「もっとお水あげたら」等々話をしてみたが、暑さで咲かないというところに結び付けるのは難しかった。
○育てることに興味をもち始めたので身近な野菜の種を植えようと計画。カブの種を子ども一人一人に見せて蒔いて、興味をもった子と一緒に水やり行うようにした。
●大きなかぶの絵本を読むと「おんなじだね」と言う子もいて興味関心の高さを感じる。
○保育者が毎日意識的に様子を観察することで子どもたちからも「みたい!」という声が挙がるようになっていく。

●継続して観察をすることで変化に気づくようになった。
○葉の生長の様子をみて肥料を追加した。たくさんの葉が出てきて実の生長も格段に速くなり子どもたちの気持ちが高まっている間に観察を楽しむことができた。

●初めての収穫。作ったものを食べるという経験が少ないためか目の前に調理されたカブが出てきても実感のない子が多い。年齢的にもそこが紐づくのは難しいかなと思うので、収穫まで楽しめたのはよかったと感じている。

◎実践後の振り返り

カブという野菜が子どもたちにとって身近で興味をもちやすい素材だったと思う。花は咲かなかったがヒマワリの前例があったことでカブの栽培にも移行しやすく、最後には畑で栽培することでさらに生長を楽しみにすることができた。幼児組の収穫にも興味をもっていたので今後も継続して“育てること”を楽しんでいきたい。

☆PT 内での協議・意見交換

・収穫をゴールにしなくてもいいのでは(その後の生長を観察してもよいのでは)。

・子どもたちが生き生き観察している。

・子どもたちに『歌』から導入できる題材がいいという点で、カブは親しみやすかったのではないかな。

事例名「カブトムシの幼虫」

令和7年11月～令和8年2月

対象児:3歳児クラス

三河島保育園
田辺 優衣

◎実際にみられた子どもの姿

11月13日

- ・おおきな幼虫の見た目や動きに圧倒されているかのように見入っていた。
- ・保育者が「手にのせてみる人？」と聞くと、静かに手を挙げる N 児、手に持っていた玩具を手渡す Y 児、「のせる!」と意気込む M 児の姿があった。それぞれ実際に手にのせてもらうと固まりじっと見つめる姿があった。
- ・飼育ケースに戻した時は、観察しながら「もぐっていくね」「ばいばーい」と声が上がっていた。



12月2日

- ・土を変える。
- 前回触れなかった子ども触ってみようとする姿があった。



2月2日

- ・「おおきくなったね」「ちいさいこはあんまりうごかないね」など幼虫の動きを見ながら声が上がった。



- ・以前青虫を育てていたことを思い出し、「ちょうちよになるのかな?」「おおきくなったらたべられちゃうんじゃない?」と子ども同士で話していた。

○援助の工夫

●保育者の思い

- 日頃から戸外遊びでは虫探しをしたり、保育室であおむしを育てていた経験もあり、生き物に興味がある子どもたちであったので、また違った幼虫の観察も興味をもつのではないかと感じた。
- 保育者と一緒に観察したり世話をしていくことで、苦手な子どもも安心感をもちながら、一人ひとりの距離感で親しめるようにしている。
- 今後、幼虫の姿が変わっていくことへの、気づきや発見が子どもたちなりに感じられるとよいと思った。
- 同じ目線で子どもたちの言葉や気持ちに共感していく。

・写真から感じたこと

M 児が幼虫を手に乗せたとき、他児の視線は、幼虫よりも M 児に向いていた。周りの子どもたちからは、得体の知れない幼虫に触る M 児の反応を見ているようであった。好奇心や戸惑いの気持ちなど様々な感情を感じているのであろうと思った。

- 幼虫の変化に気づいたり、感じたことを言葉にしたりして共有する。

○子どもたちの呟きを拾い、気づきに共感し、不思議に思ったり一緒に観察を楽しんでいく。

◎実践後の振り返り

- ・3 歳児クラスでは、カブトムシの幼虫が土の中で過ごしているため日々の観察までは至らなかったが、土の入れ替えの際には多くの子どもたちが集まる姿が見られ、興味・関心の高さを感じることができた。また、好きな子・少し苦手な子それぞれの姿がある中で、一人ひとりが安心してできる距離感を大切にしながら観察できたことは良かった。今後成長の過程により関心をもったり、ほかの生き物へと興味を広げていくきっかけのひとつになると良いと感じた。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・以前に育てた青虫の経験を思い出しての言葉を丁寧に拾いながら、幼虫が何になるのか、どこに放せば安全なのかといった問いを、保育者が子どもと一緒に考え、話題を広げていくことも面白いのではないかと意見が出た。

事例名「秋の自然に触れて」

令和7年 11月 21日

対象児:1歳児クラス

三河島保育園
茂戸藤浩志郎

◎実際にみられた子どもの姿

- ・前日、散歩先で小さな赤い葉っぱを見つける。保育者が顔に貼っているのを見て、真似をしようと赤い葉っぱを探したり、顔に貼ったりすることを楽しんでいる。
- ・イチヨウ並木のある公園に出かけ、落ち葉拾いや散策を楽しむ。気に入った葉っぱを、テープを使って自分のお面を飾り付け、マイデザインのお面を作って身につけ、楽しむ。



- ・友だちが木の実を見つけてお面に貼りつけ、自分も真似しようと木の実を探す。



- ・お面を身に着けてさらに葉がついた木の枝を持って探索したり、どんどん落ち葉を貼っていったり、保育者と一緒にお気に入りの葉っぱを探したり、それぞれの興味に沿って遊びが広がっていった。

○援助の工夫 ●保育者の思い

- 「自然物を使って遊ぶ」という活動に親しみをもてるように保育者が1つのアイデアを例示し、あそびが広がるきっかけを作る。
- 子どもたちがどれくらい自然物のあそびに興味をもつか知りたい。
- その場で気に入ったものをお面に貼っていけるようにセロハンテープをカッター板にあらかじめ貼ったものを用意する。また、動きに合わせて貼れるように持ち歩けるテープ台も用意する。
- 保育者主導でなく、興味をもった子どもを中心に、少しずつ興味の輪が広がっていくようにしたい。
- お面あそびに囚われず、それぞれの興味の向いた先を肯定的に受け止め、多様な楽しみ方が展開されていくように援助する。
- お面あそびは一つのきっかけであり、そこから自然物に触れるあそびが広がっていくようにしたい。



◎実践後の振り返り

- ・お面そのものへの興味は個人差が大きく、身につけて遊ぶ子どもは予想より少なかった。お面バンドで遊ぶ経験も過去にしていたが、最近の興味の向き方で言えばハロウィンなどで作ったような手持ちのお面にするなど、身につけない形の方が子どもたちには扱いやすかったかもしれないと感じた。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・子どもの個性が出やすい活動だった。その後の活動に繋がった。
- ・幼児クラスだと遊具あそびがメインになりがちなのでやってみたい。
- ・セロハンテープを別で持っていったことで色々な子どもの姿を拾うことができた。

事例名「 かぶってなに? おおきくなるのかな? 」

令和7年 9月 15日

対象児:1歳児クラス

三河島保育園
木下 奈々美

◎実際にみられた子どもの姿

9月15日

- ・かぶの種を撒く前に、『おおきなかぶ』のパネルシアターを見る。
- ・黒い種を見せて保育者「これなーんだ?」子どもたち「たね!」「まめ!」「くろ、たね」と答える。
- ・物語が進むにつれて、「うんとこしょ、どっこいしょ」とロ々に掛け声をかけている。
- ・かぶが抜けると、「おっさい!」「かぶたべたことあるよ〜」、「たべたいなあ」とロ々に話している。



- ・〈実際に本物の種を見る〉
小さすぎて不思議そうに見つめ続ける子どもたち。

- ・〈種まきをする〉
そっと土の上に置くように撒く。
「ここでもいいかな」と場所を確認しながら撒いていた。



- ・〈水やりをする〉
- ・かぶのイラスト看板をさしておく。
- ・かぶが泣いている絵を見て「おみずがのみたいよ〜って泣いている」と保育者に伝えている。
- ・看板に水をかけて水を飲ませている。
- ・かぶの葉に水をかけたり、土にかけたりしている。
- ・双葉を見て「ハートのかたちをしている!」と言って両手で双葉が生えている形を真似している。



○援助の工夫 ●保育者の思い

- 興味を示した子が思い思いに物語を楽しめるように、掛け声をかけ、動作を大きくしていった。
- 『おおきなかぶ』のパネルシアターを通して、かぶというものがどういうものなのか、イメージがもてるようにする。

- それぞれの発言を受け止めていく。

- 実際の種が小さくて見えにくいいため、手のひらではなく、カップに入れて見えやすいようにした。

- 一人一人が種というものがあることを知ってほしいと思い、丁寧にを見せていった。

- 種を一人一人に数個渡し、それぞれが土の上に置けるようにしていった。

- 発言を受け止め、言葉にしていく。

- かぶの絵に表情を描き、泣いている表情(みずやりが必要な時)と笑っている表情(みずやりが必要でない時)を視覚的に分かるようにしていく。

- かぶを擬人化して気持ちを代弁していくことで、子どもたちが水やりへ興味をもてるようにしていく。

- 窓のそばにマルチパーツを置き、室内からも観察できるようにしていった。

- 双葉の形を子どもたちがどう表現するのか質問して聞き、発想を引き出していく。

11月20日

- ・〈かぶを収穫する〉
- ・保育者と一緒にかぶの茎を持ち、収穫をする。「ぬけたー」「〇〇ちゃんのかぶ」「かぶのあかちゃん」など、収穫したの嬉しさやかぶの大きさなど、それぞれが思ったことを発言する。



- ・〈給食で食べる〉
- ・どこの器に乗せるか尋ねると、「ここ!(汁物)」を指さしている。
- ・収穫したものと同じものと分かっている子は、「さっきおそとでとったかぶ」と保育者に話している。
- ・「1個たべてみようかな」と挑戦する姿もあった。
- ・たべてみて「おいしい」と言ったり、「〇〇ちゃんたべられたよ!」と自慢げに話したりしていた。



○かぶをうんとこしょどっこいしょって抜いてみたい人?と尋ね、興味を示した子からかぶを収穫していく。

- 全員がかぶの収穫を経験できるように、興味を示していない子には収穫したかぶを見せ、テラスの植木鉢に誘っていく。

○一人一人にかぶを乗せる場所を聞く。

- 食べたい量、葉の部分、実の部分など、それぞれの思いを汲んでいく。

○食べる姿を見守るだけでなく、味や触感などを話題にしし話を楽しくしていく。

- 収穫したかぶをひと口でも食べてほしい。

おいしいと言っている友だちを話題にし、食べることに興味をもてるようにしたい。

◎実践後の振り返り

- ・種からかぶが育つということを理解することは難しいが、『おおきなかぶ』を見ることで、種を撒くこと、収穫することに興味を示している姿が印象的だった。
- ・水やりの仕方は子どもそれぞれ違い、最初は土に水をかけるだけだったが、双葉が生えたことで水やりに興味を示す子どもの姿があった。
- ・室内からテラスの地面に置いていたかぶのプランターを見るには、子どもの目線では見えなかったため、テラス側の窓にマルチパーツの椅子を置くことで、自然と子どもたちが乗ってプランターを見るきっかけになった。
- ・1歳児の水やりはジョーロではなく、小さいカップですることで、何回も水やりができるため、子どもそれぞれが満足するまで水やりをする機会を作れたと感じる。
- ・栽培物をその日に園内で食べることを一連のつながりとして援助していったが、家庭に持ち帰ってみたり、収穫したものを室内で見たり、触ったりする時間を多く設定することで、また別の姿が見られたのではないかと考える。次回行う際はその点も考慮して、子どもたちの発想を広げられるような環境構成を工夫していく。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・看板に表情があることで、視覚的にわかるような仕掛けになっていてわかりやすい。
看板に飲ませる(可愛がる、お世話あそびの延長で楽しんでいる)
- ・環境構成の工夫として、プランターを2つに分けておくことで、玄関から戸外に出るグループも水やりの機会をつくれたと感じる。
- ・おおきなかぶの絵本(様々な作者)のものを手に取って触れられる機会を作ったのもよかった。

事例名「植物に触れよう」

令和7年度

対象児:4歳児クラス

三那川 怜衣

◎実際にみられた子どもの姿

6月

★夏野菜(なす、きゅうり)の苗を植える

- ・当番のグループが水をあげた
- ・花が咲くと興味をもち、次第に花の所に野菜がなるとわかった子ども達は花の観察をするようになった。
- ・収穫し、中がどうなっているかみてみると茄子の種に興味をもち「これ植えたらまた茄子ができるのかな」という言葉が聞かれた。



7月

★熟れた茄子の種をペットボトルのプランターに植えてみる。

- ・小さな芽がでて「これ本当に茄子のやつ?」と雑草なのではないかと考える子どもの姿が見られた。
- その後、カビが生えてしまい、育成終了。



夏野菜を育てたことで、より植物に興味をもっているように感じた。

9月

★雑草の種を植える(オナモミなど)

- ・「これはなんの種なの?」「全部形が違うね」「色も違う」「お花も咲くのかな」などと様々な予想をする姿が見られた。



11月

- ・オナモミがなっているのを職員と見つける。はじめは興味がない様子だったが、保育者が服に付けてみると「え?!くつつくの?」「触ってみたい」「かして」など興味をもつ姿がみられた。
- ・Nは、はじめは興味をもって近くに来ていたが、自分のしていた手袋にくつつきとれないと、とても嫌そうな顔をしていた。

11月~1月

- ・雑草は生えてきていたり、花も咲いてきているが子ども達自身で興味をもつ姿は少ない。
- ・保育者が摘んでもいいことを伝え、その時だけは摘み、砂場などでつくったケーキに飾りつけたりして楽しんでいた。

○援助の工夫 ●保育者の思い

- じっくりと触れる時間を設定した。
- 子ども達のしている野菜がどのように育っていくのかを見てほしかったため、きゅうりとなすの苗を頼み、子ども達にも伝えた。(クイズにはしなかった)
- 育てたものにより興味をもてるように、子ども達の目の前で野菜をきり、断面や種の入っている様子などわかるようにした。

- 茄子の種の様子が見やすいように透明のペットボトルを容器にして植えた。

- 夏野菜を植えた経験から、植物の匂いを嗅いでみたり、触れてみる姿が多く見られたため、遊びでも使える雑草の種を購入し植えた。
- 保育者が種を植えていると興味をもったため、一緒に植えることにした。

- 保育者も一緒に楽しむようにした。

- 雑草で遊ぶとしたら、砂で作った料理に飾りつける姿しかみていない為、他の遊び方を知らせたらより楽しめるかもしれないと思う。

◎実践後の振り返り

- ・夏野菜育てから植物に興味をもち、触れる機会を多く作ることができてよかったと思う。
- ・思っていたよりも雑草が育たなかったため、手入れをしっかりとすればよかったと反省である。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・雑草の種類、看板を付ければよかった。「遊んでよい雑草」ということがわかるように看板を付ければよかった。
- ・砂場の横に雑草のプランターを置いた方が子どもが遊びの中で使いやすいのではないかと。

事例名「見えないところで育ついのち」

令和7年度

対象児:5歳児クラス

三河島保育園
菅野瑛理子

◎実際にみられた子どもの姿

9月29日

・にんじんと大根、ひとり3つずつをプランターに植える。種を保育者から渡されると種の色の違いに気づく女児がいた。「人参の種は白かったのに、大根の種はピンクだ」という言葉に、他児たちも「人参はまんまるの種だったけど、大根はなんだかへんてこりんな形だよ」など、種の色形の違いを友達に共有する姿が見られた。



・翌日、「にんじんと大根芽が出たかな」「土の中であかちゃんにんじんと大根ができていないんじゃない」「はやくみずあげなきゃ」と登園するなり、プランターをのぞきにいき、水やりをしていた。



10月6日

・ごぼうの種植えを行う。家庭から2リットルのペットボトルを1人ひとつずつ用意し、種を植えていく。以前植えたにんじん、大根の種を思い出し「ごぼうの種は何色だろう」と楽しみにする。ごぼうの種を見ると「ちいさいごぼうみたいだね」「はむすたーのうんちみたい」など色も形も違う種をよく観察してから自分のペットボトルプランターに植えていた。



11月10日

・大根の葉が育ち、根の白い部分が出てきたことに気づいた男児。「ほそいね」「だいこんってもっとふといよね」とつぶやく。「みずがたりないのかもしれない」すぐに水をあげる姿が見られた。「いつしゅうかくできるかな」と楽しみにしている。



11月25日

・大根収穫の日。1人ひとりの収穫の瞬間を「うんとこしょどっこいしょ」と声をかけあいながら楽しむ子どもたち。友だちのだいこんと比べて「わたしのほうがちいさいな」「でもかわいいからいい」と自分の大根を水で丁寧に洗っていた。



○援助の工夫

●保育者の思い

○一人ひとりに種を手に置き、じっくり観察できる時間を設けた。
●種の観察から、想像を膨らませることで、栽培への関心を高めたかった。

●家庭からのペットボトルを持ち込むことによって、より自分で育てているという感覚を楽しめるようにした。

○保育者が率先してプランターの様子を確認し、関心をもって子どもたちに成長の様子を声掛けした。

●根菜ということもあり、実ができていることがぱっとわかりにくかったので、少し土を掘ってみたりすることで成長が見て分かるように子どもたちと一緒に関わるようにした。子どもたちにも継続して見守る気持ちが育ってほしいという思いがあった。

◎実践後の振り返り

・根菜の栽培ということで、今まで栽培してきた野菜に比べて時間がかかり、かつ成長がぱっと見て分からないということもあり、子どもたちの関心が薄くなる時期があった。しかし、収穫したときの「土の中ではこう育っていたんだ!」という発見や喜びはとても大きかった。この発見を通して、もう一度育てる機会があれば、子どもたちの取り組み方も変わるのではないかと感じられた。1人ひとりが場所を決めて植えて育てたことで、収穫した野菜への愛着も強かった。

☆PT内での協議・意見交換

・一人ひとりが種を植えた場所に名前を書いた看板を挿したことで、意欲的に栽培に取り組むことができたのではない。